

イギリス科ニュースレター

July 2022

30号

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

(8号館 402号室)TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)

Email: [british\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp)

Web: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>

主任挨拶

小川浩之

2018年度、19年度以来、3年ぶりにイギリス科の主任を務めております小川浩之と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。

この間、世界は深刻なコロナ禍を経験しました。イギリス科を含む駒場の授業も、2020年度と21年度は大半がオンラインで行われ、今年4月以降、原則的に対面に戻ったところです。イギリス科のコモンルームの使用制限もほぼ解除され、現在では学生たちは、(一度に複数の人が入室しないために必要だった)事前の予約をすることなく、コモンルームを使うことができるようになってきました。教員側では、今年3月、長年イギリス科のために多大なご尽力をいただいた中尾まさみ先生が定年を迎えられましたが、4月からは東京大学特命教授として全学レベルでの重責を担っておられます。こうしてイギリス科でも様々な変化がありましたが、今回のニュースレターでは、私がこの間、イギリスとカナダにそれぞれ短期間滞在した時のことを書きたいと思います。

2020年3月には、新型コロナウイルスの感染が広がる中でしたが、イングランド東部コルチェスターにあるエセックス大学を訪れるとともに、ロンドン郊外の国立公文書館(TNA)やロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)図書館で資料調査を行うために約10日間イギリスに滞在しました。日本出発前の時点では、日本の方がイギリスよりも感染が広がっており、直前まで渡航を中止すべきか迷いましたが、エセックス大学でお会いする予定だった方々に連絡して、お互いに発熱や咳などの症状がある場合は直前でも面談をキャンセルしましょうと確認しあったうえで、思い切って出発しました。エセックス大学とはちょうど研究協力・学生交換協定を締結しようとしていた時期で(それを受けて、今年秋

からエセックス大学との間で初めて交換留学生が相互に派遣されます)、現地ではとても親切にいただきました。キャンパス内にある18世紀の建物を改装したウィヴァンホー・ハウス・ホテルに宿泊し、複数の研究者や研究協力・学生交換の担当者とお話し、滞在中にちょうど行われた政治学部のAnnual Regius Lectureにも出席できるなど、充実した訪問となりました。ロンドンに移動する電車に乗る前にコルチェスター城を見学しましたが、ノルマン様式の堅固な外観と内部の博物館(ローマ人による征服以前からの現地の考古学、歴史学的な資料が展示されています)は、とても興味深いものでした。



(Colchester Castle, March 2020)

ロンドン滞在中には、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、TNAでの文書閲覧中に翌日からの無期限閉館を知らせる館内放送が流れ、その翌日の帰国前日にはLSE図書館が急遽午後4時に閉館になるなど、緊張した状況となりましたが、何とか無事帰国することができました。ただ、イギリス滞在中にイギリスの方が感染状況が深刻化しており、(この時点では大学の規定で)帰国後14日間の自宅待機となり、イギリス科主任として出席するはずだった(コロナ禍のため簡略化して行われた)学位記授与式に出席できなくなってしまったのですが、後藤春美先生が快く代理をお引き受けくださり、イギリス科の卒業生に学位記を渡していただくことができました。

2021年11月には、カナダのモントリオールとケベック・シティを初めて訪れました。これは、東京大学グローバル・スタディーズ・イニシアティブ(GSI)のGSIキャラバンという国際共同研究活動の一環で渡航したもので、ケベック大学モントリオール校(UQAM)とケベック・シティのラヴァル大学を訪問しました。このプロジェクトは、「キャラバン」という呼称に示されるように、海外の複数の大学を訪問して研究発表を行い、海外の大学からも研究者を日本に招聘し、最終的に英語の共著論文集の刊行を目指すものです。しかし、2020年春に共同研究が始まった途端、新型コロナウイルスのパンデミックに見舞われ、相互訪問が困難になったため、オンラインでワークショップや研究会を行い、可能な範囲で研究を進めていました。ところが、2021年夏以降、ワクチンの2回接種完了を条件にカナダで入国後の隔離が免除されるようになり、短期間の出張が可能になったため、この時も迷ったのですが、この機会を逃せば共同研究期間中に一度も海外に渡航できないことにもなりかねないと考えた結果、フランス科の伊達聖伸先生と人文社会系研究科博士課程の田中浩喜さんと私の3人という限られた人数でしたが、学内での渡航承認手続きと出国前・帰国前の2度のPCR検査、帰国後の空港での抗原検査を経て、モントリオールとケベック・シティを訪れ、無事帰国することができました。

モントリオールでは、UQAM 法学・政治学図書館やケベック州立図書館・文書館(BAnQ)のGrande Bibliothèqueで文献や資料を閲覧でき、ラヴァル大学でのワークショップでは、GSIキャラバンのテーマである小国(small nations)について、コモウエルス(英連邦)およびカナダ、ケベック、ニューファンドランド、サンピエール=ミクロン島の事例に基づく発表を行うとともに、ケベック側と日本側の研究者の充実した発表を聞き、質疑応答や議論に参加することができました。また、北米(歴史を遡れば英領北アメリカ)の中のフランス語圏であるケベック州を訪れ、現地の研

究者と意見を交わす中で、自らの研究上の関心や視野を広げることができたように思います。ただ、1週間弱のカナダ滞在中に南アフリカがオミクロン株の存在を世界で初めて世界保健機関（WHO）に報告したことで、再び緊張した状況となり、帰国後には再度14日間の自宅待機となりました。ただ、この時の自宅待機はカナダ渡航前から分かっており、この時期の授業や会議はすべてオンラインで行われていたため、自宅から対応可能でした。

こうして、多くの方々にご迷惑をお掛けするとともに、自らも不安や緊張を感じつつ行った二度の海外渡航でしたが、いずれも短期間とはいえ学ぶことが多く、とても貴重な経験となりました。コロナ禍の下での渡航を可能にしてくださった皆様に、心から感謝を申し上げます。



「イギリス科と国際交流」

中尾まさみ

昨年度末に26年勤務した総合文化研究科を定年退職しました。3月20日には、オンラインと限られた人数の対面という形で、温かい雰囲気での最終講義と懇親会を催していただきました。当日ご参加いただいた皆様、寄せ書きにメッセージを頂戴した方々、そして早くから綿密に計画を進め、たいへんご尽力でこの催しを実現してくださったイギリス研究コースの先生方とお手伝いいただいた教務補佐、卒業生、現役学生の皆様には心より御礼を申し上げます。夢中で歩いてきた駒場での日々の最後に、素晴らしい思い出ができました。



（最終講義後の乾杯。ご発声は、当時の地域文化研究専攻・専攻長の森井裕一先生）

その余韻も冷めやらぬまま、この4月からは、特命教授として本部の国際化教育支援室というところに勤務しています。オフィスは本郷キャンパスの理学部1号館という新しい建物にありますが、これが大学院生のときによくお昼を食べた生協第二食堂（こちらはもう40年近く経つのに、当時とまったく変わっていません）の向かいで、時の流れが行きつ戻りつしているような、不思議な感覚にとらわれています。

私の新しい仕事は、ひとことで言えば、学生の国際交流やキャンパスの国際化全般に関わる日常業務と将来計画、ということになるでしょうか。そのひとつが、学生の留学のサポートと促進です。イギリス科（ここからは、学部のイギリス研究コースと大学院のイギリス小地域、そして同窓会も含めたこの伝統的総称を使わせていただきます）の皆様の中には、教養学部の交換留学制度 AIKOM (Abroad in Komaba)を思い浮かべられる方も多くと思います。他のどの学部にも先駆けて1995年にスタートし、木畑洋一先生も委員長を務められたこの制度は、22年間に亘って東京大学の学部生の国際交流を牽引し、協定校は世界20カ国32大学に及びました。現在では、全学の留学制度 USTEP (University-wide Student Exchange Program) に継承されていますが、この新しい制度も AIKOM が築いた優れた交換留学の実績を基盤としています。

イギリス科は、とくにこの AIKOM を利用して留学した学生を数多く輩出してきました。留学先もイギリス、アイルランド、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど多岐に亘っています。学部生にとって、これまでとまったく違った環境に1年間身を置く経験が持つ意味は、計り知れません。苦しいことももちろんあるでしょうが、留学先で長く続く友情を築いた人もいれば、受講した授業や出会った先生の影響で、進学したときには思ってもみなかったテーマで卒論を書いた人もいます。

また別の効果も生まれました。北半球の留学開始は秋、南半球は早春ですから、イギリス科では、いつも誰かが交代で海外に出ています。帰国後には次の学年と共に卒業するので、おのずと学年が混ざっている状態となり、院生も含めて学年を超えた交流が生まれます。やがて、海外の大学の博士課程に進学した先輩が学年の離れた後輩の留学に際してアドバイスをしたり、また留学生どうしが現地で交流し、時には助け合うコミュニティのようなものが形成されたりしてゆきました。すでに研究者として大学に職を得た卒業生が、それぞれの本務校のサバティカル制度でたまたま同時期に渡英し、久しぶりの再会を果たしたという

報告を受けたこともあります。こうした善意や親しみに支えられた緩やかなつながりは、イギリス科の誇るべき美質だと私は思っています。新しい仕事を引き受ける決心をしたのも、留学がもつ教育的な意味の大きさを実感してきたからにはほかなりません。

さて、現在の留学制度は AIKOM に多くを負っていますが、違いもあります。まず、長期交換留学協定校の数が83校と増え、このほかに6ヶ月、3ヶ月、短いものでは1-2週間とさまざまな短期プログラムが加わったことで、留学できる人数が大幅に増えました。先述の通り、1年間の留学には大きな意味がありますが、様々な理由からこれに踏み切れないという学生もいます。また、AIKOM では限られた定員のために厳しい選考があり、願いが叶わないケースもままありました。留学がより身近になったと言えることができるでしょう。

2020年春からの2年間は、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行の影響で、残念ながら派遣・受入ともに中止になった大学が多くありました。しかし、その間もできる限り学生の国際交流の機会を確保したいと、オンライン留学の方法が模索されました。今秋からは、ようやく実地の留学も再開されますが、同時にコロナ禍の間に得られたオンライン留学の知見は、新たな可能性を生んでいます。例えば、長期留学を考えている学生が、その第一歩として日本にいながらにして行き先の地域の歴史・文化を学び、現地での学びの準備に役立てる場合、あるいは興味はあるが、1回きりの1年の留学ならば選ばなかった国や地域と、大きな経済的負担を伴わずに交流をもちたい場合、オンライン留学を視野に入れると選択肢をひろげることができるはずです。

こうしてみると、駒場を離れて新しい職場にいながら、イギリス科の教育に携わってきたことが、自分の中で生き続けている幸せを感じます。今後も、自分の立場で学生の国際交流の促進に力を尽くしたいと思いますし、イギリス科の学部生・院生の皆様にもぜひ、積極的に留学の機会を利用し、国際経験を積んでいただきたいと願っています。



「雑感—観光・記憶・歴史—」

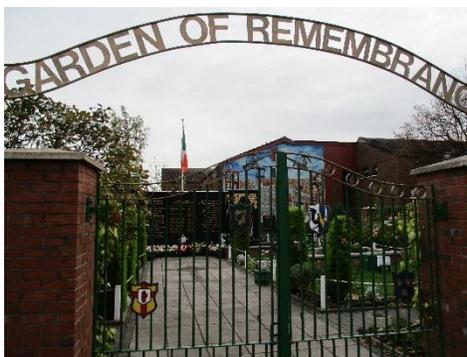
角田俊男 (32 回)

コロナ禍が続き、観光も大変厳しい状況に置かれています。様々な苦心の対応の中に、オンラインによる代替的な観光があります。それは近現代の観光の背景にある文化状況を示唆します。「観光のまなざし」という観光学の用語が示すように、近代の認識論の優位、特に視覚の支配を反映し、映像が主役を果たしています。観光はメディアを通し社会的に決定されたイメージを消費する活動という面があります。また、ポストモダンの文化では、「真正性」は、「疑似的なイベント」と対比されるよりも、演出・操作された創出と理解される傾向があり、テーマパークも文化遺産の観光も同じグローバル化への適応現象と解釈されます。つまり世界の観光市場をめぐる競争に地域文化も巻き込まれているのです。

社会経済情勢の影響を受ける観光は、世界が平和で安定していないと成長しにくい産業です。恣意的な暴政は、経済の他国への退出を招くので、抑制されるという近代の「穏やかな商業」の言説の一例と言え、観光は平和と友好を前提とし、醸成するとされます。さらに、時間の経過とともに、戦争・災害・事故など負の遺産を想起する観光に目を向けましょう。死者を悼み、その生の記憶を継承する観光です。世界大戦とホロコーストを主対象に近年欧米で構想された「ダークツーリズム」は、論争的な概念で、近現代の科学文明の傲慢さを反省する意義があるとされます。こうした観光の場所をもうこれ以上増やさないことがこの観光の目的と言えるかもしれません。時間に高低があるとすれば、高い時間となる非日常の霊的な経験を求める巡礼や宗教ツーリズムとも比較できましょう。遺産を想起する観光には、例えば、「人種」の一つの起点である奴隷貿易港（奴隷貿易で繁栄した過去を想起するリヴァプールの奴隷博物館は、王室と海軍にゆかりのグリニッジの海事博物館とは対照的な印象を受けます）、飢饉（大飢饉 150 周年のアイルランド、また同国では第一次大戦とイースター蜂起百周年）、北アイルランド紛争（ベルファスト市内のテロリズムの現場を追体験する徒歩ツアー）、震災（神戸の「阪神淡路大震災記念 人と防災未来センター」、東北地方の震災の記憶の語り部、海の常民文化の伝承）があり、大規模リゾート開発と結びついたマストツーリズムに代わる文化観光の方向が見えてきます。

数日、数時間しか観光地に滞在しない観光客は両義的な存在で、その異文化理解には偏りがあり、批判的吟味が必要です。も

っとも、長期の密着した実証が、研究対象の实在する本質を解明することを約束すると考えられるわけでは必ずしもなく、種々の部分的な解釈を相互に比較検討する方法が必要でしょう。遠く離れた無縁の他者の痛みに、偶然接した観光客には距離を越える共感と連帯が期待されるでしょうか。偶然性と気まぐれな自由が観光客の本性ですが、本来は出会うはずがない他者が偶然に直接遭遇する可能性は何を開くでしょう。観光客は国家が上から演出する国民創出のコメレーションの「終極の語彙」へのアイロニーの担い手とはなるでしょう。多文化社会の移民に対する国民の記憶への同化の問題もここに関わります。



(ベルファスト西部)

旅行により見聞した異民族の習俗文化の古典的記述として、歴史学の創始者で、同時に到達点とも評価されるヘロドトスが着目されます。その『歴史』は興味深い地域を対象としています。広く東地中海地域と中東で、バビロンからリビアか南イタリア、ナイル川上流からウクライナまで訪れたようです。彼の叙述は侵略戦争の進行、決断の政治から遷延するように、エジプトを始め各地の異民族の古事伝承を遡る詳細な地誌に延々と脱線が続けます。

ギボンがローマの廃墟での修道士の晩禱から着想を得たと自己演出した『ローマ帝国衰亡史』も古代史学を継受します。ヘロドトスに重なる広い世界を対象とし、その主題である「野蛮と宗教の勝利」はヘロドトスの異民族誌の系譜に位置づけられます。ギボンの歴史叙述も、西ローマ帝国の滅亡（朱牟田先生の訳された巻）の後、古代から彼自身の啓蒙された近代西欧の文明社会に直行することなく、東ローマ帝国（と対立する周辺イスラーム諸帝国の興亡）の長期持続の歴史を追い続けます。最後に漸くローマ市の歴史に回帰するので、私たちは古典に戻ることで、軍事専制に対する市民社会の自由と法の支配、そして、古典古代の受容の西欧とロシアの間での相違など、現在の多くの問題について示唆を受けるでしょう。ギボンは「キウ

(Kiow) の陥落後、ドニエプル川の航行は忘れられ、ウラジーミルとモスクワの大公は海とキリスト教国から切り離された。そして分裂した王国はタタールへの隷属の不名誉と盲目によって抑圧された」と述べ、ロシアの封鎖と対比し、カトリック教会の西欧ラテン世界との交流から他のスラヴや北欧の民族が摂取した「ヨーロッパ共和国の自由で寛大な精神」を強調します。

他地域に視野を広げる古代史学の受容として、ブリテン帝国のインド史理解も見ることができます。19 世紀に東インド会社の統治者の間から、インドの諸文化を尊重し奨励したオリエンタリストと、英語による西教化教育を進めたアングリシストとの論争がありました。ブリテン人によるインド史、諸宗教、哲学や法の研究は、古代史学からの他地域の精神史への関心を一つの枠組みとして展開したと考えられるでしょう。



「ウィーン/コロナ/ケンブリッジ」

渡辺愛子

ニュースレター刊行 30 号、おめでとうございます。サイトでバックナンバーを眺めていたところ、閲覧できる最古のイシューは、私が助手時代に手掛けたものでした（2003 年 10 月発行・第 7 号）。

その後就職してからあっという間に 20 年近くが過ぎてしまい、駒場から 30 分圏内の早稲田で働きながらすっかりご無沙汰してしまいましたが、2021 年度に在外研究で過ごしたイギリスでは、距離的にははるかに遠のいたにもかかわらず、イギリス科を身近に感じる機会に幾度か恵まれました。

2021 年 5 月初頭、新型コロナウイルス感染症「危険レベル 3・渡航中止勧告（渡航はやめてください）」のなか、ケンブリッジ大学が新年度の秋より訪問研究者受入れを再開するまで、留学中の長男（当時 13 歳）に帯同してウィーンにおりました。

滞在中、木畑洋一先生が監訳され、イギリス科出身の浜井祐三子さん、原田真見さんとともに翻訳に参加させていただいたりチャード・エヴァンズ著『エリック・ホブズボーム～歴史の中の人生～』が岩波書店から刊行されました。幼少期をウィーンで

過ごしたホブズボームに思いを馳せ、方々回り道をしなが、国立国会図書館に通う日々を送りました。

10月、約2年ぶりのイギリスに到着してまず驚いたのは、マスクを着けた人たちの少なさです。レストランの厨房スタッフがノー・マスクで談笑交じりに仕事をしている光景は、公共スペースでのマスク着用が義務化されていたウィーンとはまったく異なり、衝撃的でした。

当時のイギリスはヨーロッパで感染者数首位を独走中だったにもかかわらず、政府は「コロナとともに」経済の復調を目指した政策に舵を切っていました。ワクチンの普及で重症化リスクが軽減されたことにより、国民の間に安心感が広がっていたのだと思います。

11月末、そんな楽観的な気運に冷や水を浴びせたのがオミクロン変異株です。ジョンソン首相は、南アフリカ周辺諸国からの入国を制限するなど（おそらく世界でいち早く）対抗策を講じ、政府の迅速な対応をアピールしたように見えました。ところが、12月1日付の大衆紙『ミラー』が、一年前のコロナ規制中に首相公邸で大規模なクリスマス・パーティーが催されていたという一大スクープ記事を報じ、世間を震撼させます。国民が激怒したのは、パーティー疑惑が持ち上がった昨年12月が、まさに政府が国民から「クリスマスを取り上げた」時期だったからです。

新年を迎えると首相公邸での宴会に関する新情報が次々と発覚し、それは（‘Watergate’事件に引っかけた）‘Partygate’スキャンダルと呼ばれるようになりました。警察が捜査に乗り出すことになり、謝罪に追い込まれたジョンソン首相にはもはや辞任しかないのか、万事休す——と思われた矢先、飛びこんできたのが、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースでした。これに電光石火のごとく反応し、声高にロシアを非難し始めたのが、ほかならぬジョンソン首相だったのは驚くにあたりません。国民の目は否応なしに海外へと向けられ、連日、ニュースはウクライナ情勢を報じるようになりました。支持率が低下したサッチャー首相がフォークランド戦争を利用して国民の関心をそらした瞬間も、こんな感じだったのでしょか。

日々目まぐるしく変化する政局とコロナの行方に釘付けになりながら、私自身はケンブリッジでイギリス文化外交史について史料を読み進めたり、冷戦期の東側陣営におけるイギリス文学作品の浸透について考察しました。時折、ケンブリッジの街を歩き、この地にもゆかりのあるホブズボーム

の足跡を辿ったりしました。この伝記の著者であるエヴァンズ先生には二度ほどお会いする機会があり、「あの第4章（ホブズボームの陸軍従軍時代）は一番面白くないのに、なんで訳すことになったの？」と尋ねられ、やや返答に窮しました。ゴンヴィル・アンド・キーズでのハイテーブルに招待いただいた際には、臨席したあるフェローがなんと山内久明先生をご存じという文学研究者でした。また、10年以上前に草光俊雄先生よりご紹介いただいたマーティン・ドントン先生にも何度かお会いし、マスターを務められたトリニティ・ホールに最近訪られたという先生の大きな肖像画を見せていただきました。明るい色合いのなかにカジュアルな装いで佇む先生の優しいお人柄が窺える素晴らしい絵です。

帰国直前の3月は、毎日慌ただしく過ごしました。時差の関係で中尾まさみ先生の最終講義にオンライン参加できませんでした。後藤春美先生ほかスタッフの方々にご尽力いただき、後日ビデオでご講義を拝聴し感激いたしました。中尾先生はいまも東大にお勤めとのことですので、一度ご挨拶に伺いたいです。

帰国時もじつは大波乱が起き、日本到着が年度をまたいでしまったのですが、もうスペースがありません。やれやれ——。やはり、研究休暇はコロナも戦争もない平和なときに取得するのがなによりですね。



（ケンブリッジ駅のプラットフォーム。「ソーシャルディスタンス」をあらわすサインが色あせてきている。）



今年度のホームカミングデーでは、コメントルームの開室はいたしません。

また、来年度はニュースレターの発行が10月以降になるかもしれません。それまで、来年度のホームカミングデーの情報などにつきましては、イギリス科ウェブサイトをご覧ください。どうぞよろしくお願いたします。

<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/>

卒業生の方へ お願い

イギリス科ニュースレターは紙媒体と電子媒体の2種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記の卒業生専用アドレス

[igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp)
まで、送付先アドレスのご連絡をお願いいたします。

また、ご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）にご変更がごありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

ニュースレターに関しましては、経費節減と環境への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会の案内など郵送が必要な時もございます。同窓生の皆様に引き続きご支援をご検討いただけますと幸いです。

ご賛助いただけます場合は下記口座までお振込みいただけますよう、お願い申し上げます。

ゆうちょ銀行
名義：イギリスカ
口座番号：10090-2-43621671

ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合、口座番号が異なります。

銀行名：ゆうちょ銀行
支店名：〇〇八店（ゼロゼロハチ）
口座種別：普通 口座番号：4362167

2022年度 イギリス科運営委員

小川浩之（主任）
後藤春美（副主任、広報委員）
アルヴィ宮本なほ子（地域文化研究専攻副専攻長）

清水領（Sセメスター教務補佐）